

水戸学は徳川光圀による『大日本史』の編纂過程で誕生した。一般的に、徳川光圀時代を「前期水戸学」といい、徳川斉昭が藩主となった文政12年以降を「後期水戸学」という。

後期水戸学は藤田幽谷から始まる。『正名論』のなかで幽谷は、「君臣有りて、然る後に上下有り、上下有りて、然る後に礼儀措く所あり」とし、君臣上下の身分は不変であるべきで、これが確立されてはじめて社会の秩序を維持することが出来るとした。そしてこの君臣上下の名分が正しく維持されているのは、古来天皇の地位の変わる事のなかったわが国だけであるとし、尊王思想に理論的な根拠を与えた。(名越時正 1971年) 幽谷の門人であった会沢正志齋が記述した『及門遺範』の「寛政甲寅俄羅斯東蝦に來りて通市を乞ふ。先生その情偽を察し、古今戎狄の形勢を推求し瞭然掌をさすが如し。且つ其の虚誕誇張の妄説を弁破す。」という文から幽谷は、ロシア使節の来航や、フェートン号事件から対外危機意識を高め、その侵略の意図を喝破し、日本の将来を憂慮したことがわかる。正志齋は鎖国下の日本において初の本土への異人上陸事件である大津浜事件を筆談役として経験したため、師である幽谷の考えが会沢正志齋の『新論』に受け継がれていく。

正志齋によって書かれた『新論』は、彼の代表的な著書であり、幕末期に吉田松陰、真木和泉、平野国臣ら多くの志士に愛読され、尊王攘夷論の經典のような役割を果たした。『新論』は、国体三篇、形勢、虜情篇、守禦篇、長計篇の五篇七論から成る。この長計篇の中心となってくるのが尊王論であり、もともと別々の思想である攘夷論と尊王論はここに政治論として結びつくこととなった。(安見隆雄 1993年)

第9代藩主斉昭は天保期の藩政改革を行うが、その際に開設された藩校弘道館は、改革政治の中心であった。その建学理念を明示した『弘道館記』は、水戸学の精神を簡潔に記している。『弘道館記』には、斉昭の署名があるが、実際の起草者は藤田東湖であって『弘道館記』の解説書として『弘道館記述義』を著わした。『新論』が日本全体の政治のあり方を論じたのに対し、『弘道館記述義』は日本の歴史の展開過程に即して道を説き、そこから日本社会固有の道徳のあり方を明らかにしようとした。東湖は、本書の叙述をとおして、君臣上下が各人の政治的責任を果たしつつ、忠愛の誠によって結びついている国家体制が国体であり、忠愛の誠をもってそれぞれの職分を遂行していく道義心が天地正大の気であって、建国以来国体を支えてきた日本人独自の精神と考えた。これらは記紀神話に示されているとおり、建国以来のわが国の伝統であり、内憂外患の時期に、潜在的能力として備えているはずの天地正大の気を発揮して、国家の統一を強め、内外の危機を克服しなければならない、と力説している。このように水戸学の目標は幕藩体制の再編強化によって、内憂外患を乗り越え、その独立と安全を確保しようとした点にある。

(鈴木暎一 1982年) しかし開国後、幕府にその国家目標を達成し得る力が失われていくにつれ、尊王攘夷思想には反幕的色彩が強まっていくことになる。(尾藤正英 1973年)

先程述べたように水戸学に影響を受けた人物として吉田松陰の名があげられる。東北遊学の際に会沢正志齋・豊田天功らに面会、水戸学の真髓を学んだとされ、1857年に叔父の松下村塾を引き継ぎ、そこで久坂玄瑞、高杉晋作、伊藤博文、山縣有朋などを教育した。松陰は水戸から戻ると、来原良蔵に手紙を出し、「身皇国に生まれて皇国の皇国たる所以を知らず、急ぎ歸りて六国史を読む」と書いている。この一節から松陰は国の歴史を知ることの重要性を認識したことが窺える。(久野勝弥 1993年)

松陰の松下村塾の門下生、山縣有朋にも水戸学の教えは受け継がれた。有朋は、松陰から大きな影響を受けたと終世語り、生涯「松陰先生門下生」と称し誇りにしていた。1869年、有朋はヨーロッパに軍事視察の為渡航し、各国の軍事制度を視察した。翌年に帰国すると、西郷隆盛の協力を得て陸軍大輔に就任し、明治政府の軍制改革を行い、徴兵制を取り入れる。1873年に参謀本部の設置や軍人勅諭の制定に携わり、その後1890年に教育勅語を發布する。軍人勅諭は天皇が武力を掌握し、平安時代に天皇以外が武力を掌握したことを悪いこととみる史観であり、この史観は、『新論』にも共通している。教育勅語は国民道徳の面から近代国家体制の支柱として重大な役割を果たすこととなった。このように水戸学の思想は明治政府における国民道徳や国民教育に大きな影響を及ぼすこととなった。

つまり水戸学は、明治政府の指導者に受け継がれて、天皇制国家の下での教育政策や国家秩序を支える理念になったといえるのではないだろうか。

参考文献

茨城県「茨城県史」1985年

上白石実「幕末の海防戦略~異国船を隔離せよ~」吉川弘文館 2010年

鈴木瑛一「藤田東湖の思想」『日本歴史』第413号 吉川弘文館 1982年

但野正弘「明治維新と水戸学」水戸学講座講録『明治維新と水戸学』常磐神社社務所 1993年

名越時正「水戸学の道統」鶴屋書店 1971年

尾藤正英「水戸学の特質」日本思想大系『水戸学』岩波書店 1973年

尾藤正英「尊王攘夷思想」岩波講座『日本歴史』近世五 岩波書店 1977年

安見隆雄「後期水戸学と烈公の改革」水戸学講座講録『明治維新と水戸学』常磐神社社務所 1993年

久野勝弥「幕末志士と水戸藩」水戸学講座講録『明治維新と水戸学』常磐神社社務所 1993年